

第2章 漢方の診断技術（四診）

四診とは望診、聞診、問診、および切診の総称で、漢方ではこの4つの診察法によって収集した情報を総合分析して最終的な診断と、治療方剤の決定、即ち“証”に到達する。

望診には、病人の全体的観察、部分的な観察、及び舌診が含まれる。

聞診は、病人の声、咳、呼吸や排泄物の観察。問診は病人の愁訴や病歴の系統的聴取。切診は主として脉診と腹診である。

1) 診察の順序

(1) 患者の顔貌、歩行、全身状態の観察（望神）

一瞥して重症か軽症か？神、即ちvital signや意識、精神の状態。また、陰証か陽証か、特異的な外観、動作や体形上の特徴などを観察。

(2) 主訴を聞く（問診）

現代医学的な症状の訴えだけでなく、漢方的に病気の在る部位の見当をつける（気血津液、五臓六腑、十二経脈、奇経八脈など）。

(3) 問診により少くとも陰陽虚実（病気の属性、邪正の勢）、気血水の状態（基礎物質の過不足）等の見当をつける。証を決める上に決定的な自覚症状はあるか？（例 寒熱往来、寒熱交錯、夜間頻尿等）

(4) 望診と聞診

顔の色艶、眼光、皮疹発斑、浮腫や細絡等。舌証、音声、咳嗽等。

(5) 脉診

浮沈、数遅、虚実の他、特異的脉状は？

(6) 腹診（腹壁の硬軟や厚薄、皮膚の湿乾、色艶、腹証）

何か決定的な腹証があるか？（例 胸脇苦満、小腹不仁、瘀血点等）

(7) 補足的四診

1. 望 診

望診の実際

(1)精神の状態、(2)顔や皮膚の色沢、(3)病人の姿態を慎重に観察する。

望診は病人が診察室に入ってくる時の歩き方や動作、表情の観察などから既に始まっているもので、特別に構えて行うものではない。また聞診や問診で得られる情報と一体になっている。

望診と同時に舌診を行う。

(1) 精神状態(望神)

“神”とは人の生命活動の外的表現であり、また精神活動や意識の働きそのものである。また診察に際しては、望神は病人の表情、顔色、姿勢、言語、意識状態等の総括であり、以上の諸点を一瞥して得られる第一印象とでも言うべきものであるが、病状の軽重、予後の良否の判断の上では欠かせないものである。

(2) 顔や皮膚の色沢

① 人の健康状態や気血の盛衰は顔色に現れ易い

白色は一般に、寒証、虚証を現している。顔色が蒼白くむくんだように見える人は、気虚、陽虚、或いは気血両虚が多く、顔色が一見乾燥して、唇の色が淡白で体形がやせている人は血虚であることが多い。

青或いは紫色は、風寒の邪に侵された時、瘀血、或いは疼痛がある時が多い。風寒の邪に侵されて頭痛や腹痛を起こしている時は病人は蒼白い顔を呈する。また気滞や瘀血があって、気血の運行が阻害されている人は、顔色が青黒かったり口唇が青紫色であったりする。

紅色は多くの場合熱証の表現である。顔面紅色と共に多汗、口渴、便秘を伴えば実熱証であり、午後から発熱と共に顔面紅潮し、発汗せず四肢煩熱するのは陰虚火旺による虚熱である。

黄色は虚証湿証を現わす。鞏膜及び皮膚の黄染は黄疸である。

皮膚が淡黄で乾燥或いはむくみ、口唇が蒼白なものは“萎黄”と称し、気血の虚損、消耗を表現している。

黒色は腎虚或いは瘀血の現れであることが多い。慢性の瘀血では顔色や皮膚が紫がかって黒ずんだり荒れることがある(肌膚甲錯)。

また眼のまわりがつやがなく焦げたように黒ずんでくるのは腎の陰陽両虚であったり、或いは肝腎陰虚のことが多い。眼の下のクマは瘀血や冷え症(心腎陽虚)に多い。